

「全てのクリスチャンに向けられた大宣教命令」その二

28:16 しかし、十一人の弟子たちは、ガリラヤに行って、イエスの指示された山に登った。

28:17 そして、イエスにお会いしたとき、彼らは礼拝した。しかし、ある者は疑った。

28:18 イエスは近づいて来て、彼らにこう言われた。「わたしには天においても、地においても、いっさいの権威が与えられています。

28:19 それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。そして、父、子、聖霊の御名によってバプテスマを受け、

28:20 また、わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るように、彼らを教えなさい。見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。」

はじめに

先週、「全てのクリスチャンに向けられた大宣教命令」と題した 2 回にわたるメッセージを始めました。導入部分が長かったので、先週は 5 つの要素のひとつめだけお話ししました。

その中で、多くのクリスチャンが教会を選ぶときに以下の 3 つのうちのどれかに重きを置いているとお話ししました。

1. 交わり - これを選ぶ人は、「類ともと思える人はいるだろうか」「同じような考えを共有できる人とよい交わりができるだろうか」と考えます。
2. 聖書の教え - クリスチャンの中には、聖書の教えを最重視する人がいます。毎週、神のみことばが忠実に教えられている場を求めるのです。
3. 賛美や礼拝のスタイル - 賛美や礼拝のスタイルを一番に考える人もいます。音楽のスタイルが自分に合わないと居心地が悪いのです。また、特定の礼拝スタイルを求める人もいます。

この 3 つは大切ですし、それら自体は何も問題ありませんが、どれも教会が目標とすべき事柄ではありません。

先週の学びで、神に栄光をもたらすことがすべての信徒の目指すべき目標であることがわかりました。

そして、その最善の方法は、今私たちが学んでいる「大宣教命令」に従うことです。

先週、私たちは「神に自らを差し出すこと」に焦点を当てました。

私たちがイエスに自らを差し出さなければ、イエスに召されて送り出していただくことはできません。

イエスが私たちの人生に立てておられるご計画と目的に完全に明け渡すことが第一段階だと先週学びました。

イエスのご計画をもって踏み出さなければ、いずれ袋小路に入ってしまうでしょう。

袋小路とは、どこにも通り抜けられない行き止まりの道のことです。U ターンして、もと来た道に戻る以外にありません。

行き止まりの道に入りたくて入る人はいません。クリスチャン生活や奉仕でも行き詰りたくないのと同じです。

イエスは、道を示す地図、聖書を与えてくださっています。

イエスは私たち皆にご計画をお持ちですが、その出発地点は、イエスのご計画にゆだねることです。

弟子たちは、イエスのご計画に従い、ガリラヤまで出かけて行って、教えをいただきました。

イエスが示された山に到着したとき、弟子たちの反応はふたつに分かれました。

イエスを礼拝した者と、疑念を持った者がいたのです。

1. イエスを疑わずに礼拝する。(17-18 節)

聖書はいつも正直に物事を伝えます。イエスを礼拝した弟子たちもいれば、疑念を抱いた弟子たちもいたと語ります。

新約聖書で弟子たちがイエスを礼拝したと伝えているのは一か所だけです。

マタイ 14 : 22-33

14:22 それからすぐ、イエスは弟子たちを強いて舟に乗り込ませて、自分より先に向こう岸へ行かせ、その間に群衆を帰してしまわれた。

14:23 群衆を帰したあとで、祈るために、ひとりで山に登られた。夕方になったが、まだそこに、ひとりでおられた。

14:24 しかし、舟は、陸からもう何キロメートルも離れていたが、風が向かい風なので、波に悩まされていた。

14:25 すると、夜中の三時ごろ、イエスは湖の上を歩いて、彼らのところに行かれた。

14:26 弟子たちは、イエスが湖の上を歩いておられるのを見て、「あれは幽霊だ」と言って、おびえてしまい、恐ろしさのあまり、叫び声を上げた。

14:27 しかし、イエスはすぐに彼らに話しかけ、「しっかりしなさい。わたしだ。恐れることはない」と言われた。

14:28 すると、ペテロが答えて言った。「主よ。もし、あなたでしたら、私に、水の上を歩いてここまで来い、とお命じになってください。」

14:29 イエスは「来なさい」と言われた。そこで、ペテロは舟から出て、水の上を歩いてイエスのほうに行った。

14:30 ところが、風を見て、こわくなり、沈みかけたので叫び出し、「主よ。助けてください」と言った。

14:31 そこで、イエスはすぐに手を伸ばして、彼をつかんで言われた。「信仰の薄い人だな。なぜ疑うのか。」

14:32 そして、ふたりが舟に乗り移ると、風がやんだ。

14:33 そこで、舟の中にいた者たちは、イエスを拝んで、「確かにあなたは神の子です」と言った。

ある聖書注解者は次のように語ります。

「しもべが神を本当の意味で礼拝していなければ、すぐれた才能や賜物と仕える意欲があっても、本当の意味で神に仕えることはできない。」

おそらく、神の栄光のためにイエスに仕えるのでなければ、何をしても自分のためにしていることになるので、きよい明け渡した心で神を礼拝していることにはならない、というのが論旨でしょう。

この時点でまだ疑っている弟子がいるのは驚きです。

イエスのご自身が神であることを証明するためにあらゆる奇跡を起こされました。さらに、死からよみがえって弟子たちに何度も姿を現されました。それでもまだ、イエスを信じ切れない弟子たちがいました。

とは言え、まだ聖霊がくだっておられないときで、弟子たちはまだ、聖霊に満たされて奉仕のために力をいただくという体験をしていなかったもので、弁護の余地はあります。

ただし、聖霊に満たされていたとしても、思考の中の戦いはすべてのクリスチャンが直面する問題です。

コリント第二 10 : 3-5

10:3 私たちは肉にあって歩んではいても、肉に従って戦ってはいません。

10:4 私たちの戦いの武器は、肉の物ではなく、神の御前で、要塞をも破るほどに力のあるものです。

10:5 私たちは、さまざまの思弁と、神の知識に逆らって立つあらゆる高ぶりを打ち砕き、すべてのはかりごとをとりこにしてキリストに服従させ、

思考の中の戦いに勝利する方法は、イエス・キリストの心を持つことです。

イエスは常に、旧約聖書に記された神のみことばに敬意を持っておられました。そしていつも、どんな犠牲を払っても神のみこころを成そうとされました。

イエスは常に、神がみことばの約束を成就してくださるという「信仰」をお持ちでした。疑念は悪魔からのものです。神のみことばを疑うという悪魔の誘惑には抵抗しましょう。聖書で最初に悪魔が語ったと記録されているのは、神のことばを疑うようエバをそそのかす言葉です。

創世記 3 : 1

3:1 さて、神である【主】が造られたあらゆる野の獣のうちで、蛇が一番狡猾であった。蛇は女に言った。「あなたがたは、園のどんな木からも食べてはならない、と神は、ほんとうに言われたのですか。」

というわけで、大宣教命令に従うためのふたつめの要素は、イエスというお方を疑わず、心と思いを尽くして礼拝することです。

イエスは、私たちが人生で一番大切にすべきお方です。

2. イエスの権威に敬服する。(28 : 18b)

大宣教命令に従うための次の段階は、イエスの権威を認めて服従することです。

イエスは、天と地のいっさいの権威がご自身に与えられていると明言されました。

なぜそれが重要なのでしょうか。なぜイエスは、この事実を弟子たちに指摘されたのでしょうか。

ここで「権威」と訳された原語のギリシャ語は、「エクスーシア」という単語です。これは、行動・発言する自由や権利を持つことを指します。神に関して、この自由と権利は絶対的で無制限です。

イエスは公生涯で、ご自身の権威を示されました。マタイ 4 : 25、9 : 35 では病に対して、マタイ 4 : 24、8 : 32、12 : 22 では悪霊に対して、マタイ 9 : 6 では罪に対して、マルコ 5 : 41-42、ヨハネ 11 : 43-44 では死に対して権威があることを示されました。

また、イエスは特定の弟子たちにご自身の力を授ける権威をお持ちでした。

マタイ 10 : 1

10:1 イエスは十二弟子を呼び寄せて、汚れた霊どもを制する権威をお授けになった。霊どもを追い出し、あらゆる病気、あらゆるわずらいをいやすためであった。

また、さばきをくだす権威をお持ちでした。

ヨハネ 5 : 26-27

5:26 それは、父がご自分のうちにいのちを持っておられるように、子にも、自分のうちにいのちを持つようにしてくださったからです。

5:27 また、父はさばきを行う権を子に与えられました。子は人の子だからです。

旧約聖書でも、預言者ダニエルはイエスに主権が与えられることを予見しました。

ダニエル書 7 : 13-14

7:13 私がまた、夜の幻を見ていると、見よ、人の子のような方が天の雲に乗って来られ、年を経た方のもとに進み、その前に導かれた。

7:14 この方に、主権と光栄と国が与えられ、諸民、諸国、諸国語の者たちがことごとく、彼に仕えることになった。その主権は永遠の主権で、過ぎ去ることがなく、その国は滅びることがない。

イエスは、弟子たちに大宣教命令を与えられる前に、ご自身の主権を確立されました。それは、弟子たちが大宣教命令に応じて務めを果たせるという確信を与えるためです。

イエスが計画を後押ししてくださっているなら、できないはずはありません。

あらゆる国の人々を弟子とする、というのは当時は不可能な務めに思えたでしょう。しかし、みこころをなせるよう、イエスが後押ししてくださり、イエスの力が弟子たちに授けられていました。

大宣教命令に従うなら、イエスは私たちのことも召しに応じて働けるように整えてくださいます。そして、務めに必要なものはすべて与えてくださいます。

これは **100%確実**です。

私は5年前に OIC に赴任しましたが、皆さんの主任牧師として仕えられるように、イエスは **30年間**もかけて私を訓練し整えてくださいました。

私はそれまで一步一步、大宣教命令に従って歩んできました。皆さんもどうか、イエスに仕える人生に続くステップを踏み出してください。そして、イエスの弟子となり、弟子を作ってください。

最初の一步を踏み出すのは簡単ではありませんが、今日はその一步を踏み出すのにふさわしい日です。

3. イエスの命令に従う。(28:19-20a)

大宣教命令に従う次の段階は、イエスの命令に従うことです。

これは、ここまでの段階を踏んで初めてできます。

イエスに自らを差し出し、イエスというお方を礼拝し、イエスの権威を認める。この **3つ**ができていなければ、命令に従って実際にあらゆる国の人々を弟子とすることはできません。

イエスがこうおっしゃったのは、宇宙の主権者だからです。そして、弟子たちに、イエスの証人となるよう命じる権威をお持ちだからです。

イエスは、弟子たちが命令に従えるようにする力をお持ちでした。

「弟子とする」というのが **19-20 節**に登場するおもな動詞であり、おもな命令です。ですから、それがどういう意味かを理解するのが大切です。

「弟子」と訳された原語のギリシャ語には、いくつかの意味があります。

この個所では、イエス・キリストを信じてついていき、イエスから常に学んで従う人を指します。

ヨハネ 8 : 31-32

8:31 そこでイエスは、その信じたユダヤ人たちに言われた。「もしあなたがたが、わたしのことばにとどまるなら、あなたがたはほんとうにわたしの弟子です。

8:32 そして、あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします。」

イエスの教えから、弟子として訓練されることは通常のクリスチャンの生き方であることが明らかです。

献身度の高いクリスチャンのための特別な訓練ではありません。

ルカ 18 : 18-23

18:18 またある役人が、イエスに質問して言った。「尊い先生。私は何をしたら、永遠のいのちを自分のものとして受けることができるでしょうか。」

18:19 イエスは彼に言われた。「なぜ、わたしを『尊い』と言うのですか。尊い方は、神おひとりのほかにはだれもありません。

18:20 戒めはあなたもよく知っているはずですが。『姦淫してはならない。殺してはならない。盗んではならない。偽証を立ててはならない。父と母を敬え。』」

18:21 すると彼は言った。「そのようなことはみな、小さい時から守っております。」

18:22 イエスはこれを聞いて、その人に言われた。「あなたには、まだ一つだけ欠けたものがあります。あなたの持ち物を全部売り払い、貧しい人々に分けてやりなさい。そうすれば、あなたは天に宝を積むことになります。そのうえで、わたしについて来なさい。」

18:23 すると彼は、これを聞いて、非常に悲しんだ。たいへんな金持ちだったからである。

この役人は、永遠のいのちを求めてイエスのもとにやって来ました。それは正しい選択です。しかし、彼はイエスについていくために自分の人生や所有物を捨てようとはしませんでした。それで、彼はイエスの弟子になりませんでした。

役人は、イエスに彼の救い主にはなかってほしかったけれども、人生を支配する主として迎えるつもりはありませんでした。

ルカ 14 : 25-33

14:25 さて、大ぜいの群衆が、イエスといっしょに歩いていましたが、イエスは彼らのほうに向いて言われた。

14:26 「わたしのもとに来て、自分の父、母、妻、子、兄弟、姉妹、そのうえ自分のいのちまでも憎まない者は、わたしの弟子になることができません。

14:27 自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしの弟子になることはできません。

14:28 塔を築こうとするとき、まずすわって、完成に十分な金があるかどうか、その費用を計算しない者が、あなたがたのうちにひとりでもあるでしょうか。

14:29 基礎を築いただけで完成できなかつたら、見ていた人はみな彼をあざ笑って、

14:30 『この人は、建て始めはしたものの、完成できなかつた』と言うでしょう。

14:31 また、どんな王でも、ほかの王と戦いを交えようとするときは、二万人を引き連れて向かって来る敵を、一万人で迎え撃つことができるかどうかを、まずすわって、考えずにいられましょうか。

14:32 もし見込みがなければ、敵がまだ遠くに離れている間に、使者を送って講和を求めましょう。

14:33 そういうわけで、あなたがたはだれでも、自分の財産全部を捨てないでは、わたしの弟子になることはできません。

どの個所も、どんな犠牲を伴ってもイエスについていこうという明け渡しが弟子の条件であることを示します。

ですから、イエスの弟子を作るには、私たちがまずイエスの弟子でなければなりません。

では、イエスの弟子がすべきことについて、イエスは何と言っておられるでしょう。

その内容は、行く、バプテスマを授ける、教える、という3つの言葉に集約されています。

a) 行く

「行って」と訳されたギリシャ語の意味は少し違います。この単語は、「行かされた」という意味です。

弟子を作るためには、行かなくてはならない、というのが前提です。これは明白ですが、そう思わない人もいるようです。

現代では、私たちは人が教会に「来る」ことを期待します。けれども、それは実際には起こっていません。

ですから、教会に人がたくさん集まっていた時代には「行く」という言葉がもっと妥当性があると受け止められていたのかもしれませんが。

後ほど、「行く」という言葉を真剣に受け止めて、多くの日本人にイエスを伝えた人のことをお話します。

現代の言葉で言うなら、イエスは、「行きなさい。ぐだぐだ言わずにさっさとやるべきことをやりなさい」と言われるかもしれません。

b) バプテスマを授ける

「行って」の次に登場する単語は「バプテスマを授ける」です。

信徒はまず父と子と聖霊の御名によってバプテスマを受けなければならないということです。

この父、子、聖霊の3つは、三位一体の神を指します。神は三位格をお持ちですがひとりの神です。

人がイエス・キリストを救い主であり人生の主として信じて受け入れると、神の聖霊によって新生します。そして、神の子となったという確信と平安が内側にあること目に見える証としてバプテスマ、つまり洗礼を受けます。

洗礼を受けることは、イエス・キリストに心からついていく人になったことを公に証する行為です。

洗礼という行為自体に救いの恵みはありませんし、救いをもたらしません。純粹に、神に従って証をする行為です。

しかし、本当に新生し、イエスを救い主であり人生の主であると信じたのに洗礼を受けないなら、それは不従順な行為です。

イエスを心から信じているのにまだ洗礼を受けていないなら、すぐに洗礼を受ける準備を進めてください。

使徒 8 : 26-40 に登場するエチオピア人は、イザヤ書の教えがイエスについて語っていることを知りました。そして、聖書からあらゆる説明を受けると、すぐさま洗礼を受けたいと申し出ました。ピリポは、心底信じているなら洗礼を受けることができる、とエチオピア人に告げました。(37 節)

本当に心を新しく変えられたなら、次のステップは洗礼です。

c) 教える

弟子たちは、新しい信徒たちに何を教えればよいのでしょうか。その答えは、イエスから教わったすべてのことです。

ヨハネ 14 : 19-26

14:19 いましばらくで世はもうわたしを見なくなります。しかし、あなたがたはわたしを見ます。わたしが生きるのです、あなたがたも生きるからです。

14:20 その日には、わたしが父におり、あなたがたがわたしにおり、わたしがあなたがたにおることが、あなたがたにわかります。

14:21 わたしの戒めを保ち、それを守る人は、わたしを愛する人です。わたしを愛する人はわたしの父に愛され、わたしもその人を愛し、わたし自身を彼に現します。」

14:22 イスカリオテでないユダがイエスに言った。「主よ。あなたは、私たちにはご自分を現そうとしながら、世には現そうとなさらないのは、どういうわけですか。」

14:23 イエスは彼に答えられた。「だれでもわたしを愛する人は、わたしのことばを守ります。そうすれば、わたしの父はその人を愛し、わたしたちはその人のところに来て、その人とともに住みます。

14:24 わたしを愛さない人は、わたしのことばを守りません。あなたがたが聞いていることばは、わたしのものではなく、わたしを遣わした父のことばなのです。

14:25 このことをわたしは、あなたがたといっしょにいる間に、あなたがたに話しました。

14:26 しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、また、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださいます。

現代の私たちには聖書全巻が手元にあります。イエスについて誰かに教えるためには、私たち自身がまず聖書通読をし、それぞれの書をよく理解しておく必要があります。

OIC のシリーズ説教では、マタイの福音書に記されたイエスの五大説教について学んだところからです。これは、最初に教えるのにとっても適しています。

この教会でおこなってきた弟子訓練では、弟子として参加する人全員に聖書通読と聖句暗唱を勧めてきました。

聖書の知識ときよい生き方は、イエスのことを人に教えるうえで重要なふたつの要素です。

知識があっても、イエスを手本とした生き方をしていなければ、何の役にもたちません。人は、聖書を読む前に、私たちの生き方を見るでしょう。

私たちにとってイエスがリアルな存在でないなら、そして聖霊が私たちの生き方を変えようと働いておられないなら、他の人に教えるという意味であり役には立てないでしょう。

4. イエスからの力 (28 : 20b)

大宣教命令の最後の部分はとても大切です。これまでに挙げた要素すべてに従ったけれども、弟子を作るためにイエスの力をいただけていないなら、あまり貢献できないでしょう。

日本語で読むと、ここでイエスが語っておられることの重要性が明確にわかりません。

原語のギリシャ語では、日本語で「見よ」と訳された単語は「イドゥー」です。これは、イエスをご自身に注目するよう呼び掛けておられることを意味します。世の終わりまでも弟子たちといつものともにおられるというイエスのご臨在に注目するのです。

つまり、大宣教命令に従う人々は、つねにイエスが支援してくださるということです。イエスは、その人たちを決して離れたり捨てたりなさいません。

これは私たちにとって素晴らしい知らせです。何も心配する必要はありません。さっさとやるべきことをやればよいのです。

適用

最後に、本当にあった話を皆さんにお分かちします。大宣教命令に従ったらどんなことが起こるか考えさせてくれる話です。もちろん、起こる事柄は各人違いますが、人生に行き詰っていた日本人男性に起こった実話が皆さんの励みになればと思います。

昔、ドイ・ヒロジさんという若者がいました。彼は、自分の人生は失敗だという挫折感を味わいながら藤井寺周辺をふらふらとさまよっていました。いくつも職を転々とし、仕事を失って落ち込んでいました。

そんなとき、電柱に貼ってある特別集会のポスターがふと目に入りました。他に何も用事がなかった彼は、そこに行ってみることにしました。

それは、クリスチャンの集会でした。

説教者は、賢い人と愚かな人の話をしていました。

ルカ 6 : 46-49

6:46 なぜ、わたしを『主よ、主よ』と呼びながら、わたしの言うことを行わないのですか。

6:47 わたしのもとに来て、わたしのことばを聞き、それを行う人たちがどんな人に似ているか、あなたがたに示しましょう。

6:48 その人は、地面を深く掘り下げ、岩の上に土台を据えて、それから家を建てた人に似ていません。洪水になり、川の水がその家に押し寄せたときも、しっかり建てられていたから、びくともしませんでした。

6:49 聞いても実行しない人は、土台なしで地面に家を建てた人に似ています。川の水が押し寄せると、家は一ぺんに倒れてしまい、そのこわれ方はひどいものとなりました。」

この話をどのように自分の人生にあてはめるかを説教者が説明するのを聞いて、ヒロジさんは自分の人生はまるで土台なしで建てた家のように感じ、はっとしました。

集会が終わると、ヒロジさんは、どうすれば岩の上に家を建てられるのかと説教者に尋ねました。そして、イエスを信じました。

すると、一瞬にして、彼には生きる目的が生まれました。イエスに仕えることです。

彼は大学に進んで教員免許を取り、クリスチャンの女性と出会って結婚しました。

しかし、戦争で中国に出兵させられ、そこで2年間捕虜となりました。

厳しい寒さ、空腹、病気、そして洗脳と拷問に耐えました。

それでも彼は、揺るぎませんでした。人生をイエスという岩の上に築いていたからです。

ヒロジさんの信仰は報われ、ついに帰国することができ、家族との再会も果たしました。

教師の職を定年退職すると、彼はキリスト教団体で病院伝道の奉仕をするよう召されていると感じました。

そして、残りの生涯、イエスを証して過ごしました。

今は天国で報いをいただいています。

すべては、ひとりの人が大宣教命令に従ったことから始まりました。電柱に集会のポスターを貼り、賢い人と愚かな人の話を語ったのです。

現在、大阪には土台なしで人生を築いている人たちが何百万人もいます。私たちは、その人たちにイエスを知らせなければなりません。その人たちもヒロジさんのように、イエス・キリストという岩の上に人生を築くことが出来るようになるためです。そうなれば、その人たちは生きる意義を見だし、イエスの弟子となれます。

そして、永遠のいのちがもたらす恵みのすべてに与れます。

ですから、先延ばしにせず、今日から大宣教命令に従うことを目指しませんか。その道がどこに続くかは、神のみをご存知です。